

---

# 六丁目の嵐

犬山健介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

六丁目の嵐

### 【Nコード】

N6010M

### 【作者名】

犬山健介

### 【あらすじ】

社会のどこにも居場所を見つけれない若者たちの喜怒哀楽と中高年の悲哀。  
酔いどれ女の悲劇が台風の目になって、  
あなたの六丁目に嵐がやってくる。

## 連載第一回

### 六丁目の嵐

犬山健介

1

雨はますます激しさを増していた。

田所清二は、店長の蒲生浩平に頼んで傘を二本用意してもらったが、女は立つのがやつの状態で、ひとりではまともに歩くこともできず、結局清二が、ひとつ傘の下で彼女のノースリーブの肩を抱きささえてやらなければならなかった。

コンビニの店の前の駐車場で、オートバイを何台か停めて、あまり照明の届かない薄暗い隅っこに雨宿りしていた数人の若者が、さつきから興味深そうに、少し危険な目つきでじっとこちらを見ていた。

清二は、なるべく彼らと目を合わせないようにしながら、困り果てたような顔で蒲生浩平にささやいた。

「でも、いいんですかね、ぼくの部屋で。そりゃ、他にだれもいませんから、朝まで気兼ねなしに寝ることはできるでしょうよ。しかし、部屋は散らかってるし、布団だって、ぼくのしかありませんからね」

「いいも何もあるかい、さあ」

早く行けよというように、蒲生はやはり若者らの目が気になるのか、小さく手をふって言った。

「本人がいいって言うてるんだから、それでいいじゃないか。とに

かく、店の前で寝っ転がっていられたんじゃ、危なっかしくていいん。ほんとうは警察か救急車を呼ぶべきなんだろうが、ま、このひとも世間体つてものがあるだろうからね。その代わり、部屋で寝かせたら、すぐ戻って来いよ。あんまりゆっくりされると、また、べつの心配をせにやならんぞな」

「なんですか、べつの心配つて」

「いいから早く行けよ」

「そんな心配があるんだったら、店長が連れてってくださいよ、部屋の鍵を渡しますから」

田所清二は、急に顔が熱くなって、怒ったように言った。ちよつと油断するとすぐ倒れそうになる女は、すでにずぶぬれの状態で、むき出しの肩の肉がつるつるするのだった。

《このぶんじゃ、シャワーも使わせないわけにはいかないだろうけど、いやだなあ、あそこだけは他人に入ってもらいたくないなあ》

彼がこんなことを考えてひとりドキドキしていると、蒲生浩平は急にこわい顔をして彼の頭をコツンと小突いた。

「なに言つてやがる、おれには店の仕事があるじゃないか」

「店の仕事なら、ぼくだって……」

「いいか、おい、この店の店長はおれだ。アルバイトだろうとなんだろうと、おまえは部下だ。わかるな。わかつたらつべこべ言わずに早く……なに？　それがどうした？　関係ない？　関係ないとはなんだ。おまえなあ、そういう言い方をするから、いつまでたっても就職が決まらないんだ。いいから早く行ってこい。これは命令だ。第一、この女をなんとかしなきゃって、最初に言い出したのは、おまえじゃないか」

女がよろよろするので、田所清二のほうも右に左にふらついて、まるで二人とも酔っ払った恋人同士のようになった。もつともそれは、彼の体力ではこのポリウムのある肉感的な女の身体を支えるの十分でないせいもあった。雨宿りしていた若者のだれかが、それを見て、挑発するように鋭く口笛を鳴らした。ヒヒヒと下品に嗤う

者もいた。よせよ、ほつとけ、と仲間を諫める声もかすかにだが聞こえた。いったん店のなかに入った蒲生浩平が、びつくりしたように飛び出してきて、傘も差さずに二人の前に立ちふさがった。

「やつぱり、どうだろうね、警察を呼ぼうか、それともやつぱり、救急車のほうがいいかな。本人がいやだと言っても、こつちの立場もあるし、それにやつぱり心配なんだよ。いや、おまえのことを疑ってるんじゃないがね。しかし、相手が相手だろう、こんな……いや、その、大酒食らって意識も朦朧としているような女がだよ、それもまあ、店によく来てくれるお客さんにはちがいないが、一日か二日に一回、パンと牛乳と、それからたばこを買いに来るぐらいなもので、ほとんど口もかわしたことがないような女がだよ、どうしてまた、急におまえの部屋に泊めてくれなんて言い出したんだろうねえ！　なんだか、わざとらしいじゃないか。え、あとで面倒でも起こりやしないかね！」

「うるさい！」

意外なほどはつきりした声で、女がふいに叫んだ。それがあんまり彼女の色っぽい印象とかけ離れた声だったので、後ろのほうで大笑いが起こり、蒲生浩平は啞然として立ちすくみ、田所清二はクスツと笑った。

アパートは店の裏手のすぐ近くにあり、歩いても五分ぐらいなものだった。それでも雨のなかを苦勞して歩いてやっと部屋にたどり着くと、田所清二は部屋の電気をつけて、少しおろおろしながら女に言った。

「いや、いいですよ、どうぞどうぞ、遠慮なく使ってください。風邪でもひいてはたいへんですから！　しかし、あなた、ちゃんと入れるんでしょうね。またさっきみたいに倒れ込まれても、ぼくはなにもしてあげられませんよ。それに、ぼくはすぐ店に帰らなきゃいけないんです。あなたが風呂からあがるまで、待っていられますからね！」

彼は言うだけのことを言うと、すぐ部屋から出て行こうとした。

知らない女をひとり残して、不用心ではないかという考えは少しも起こらなかった。彼女がこのまま泊まっていこうと、あるいは途中で気が変わって部屋から出て行こうと、それも彼にとってはあまり使ってもよいことだった。ただ、万年床の薄汚れた布団だけはあまり使ってほしくなかった。それから、彼がまだそこにいるのに、浴室の前で濡れたピンクのブラウスのボタンを三つも外した恰好で、「ねえ、ちよっと、タオル！」と大声で怒鳴るのには少々腹が立った。もっとも、彼がわざわざ押入から新しいタオルを出してやると、女はぺこりと頭を下げて、ごめんなさいね、と低くつぶやき、少し反省したようにじつと彼の目を見つめるしおらしさも見せた。

「いいですか、ドアの鍵はぼくが外からかけていきますが、あなたは気にすることはありませんよ」清二はすぐに顔をそむけて言った。「出て行きたくなったら、いつでもかっけてに出て行きなさい。鍵をかける必要ありません。なあに、こんな部屋に入る泥棒なんていませんからね！」

最後の注意のようにこう言い捨てると、彼はちよつとなにかにつまづいてゴトンと大きな音を立てながら、玄関の狭い土間に降りた。何か言い残したような気がしなくてもなかったが、後ろではもう、服を脱ぐ気配がしているので、一度止めた手を再び動かし、急いで靴を履こうとした。

そのときふいに、だれかが、これも乱暴な大きな音を立てて、ドアを外側から立て続けに数回ドンドンと叩いた。最初はいきなり叩かれたと思ったのだが、その直前にドアの外でなにやら小さな物音がしていたのを、清二はとっさに思い出した。彼はぎょつとして、ほとんど反射的に後ろをふり返った。しかしその瞬間には、今、女が脱衣中であることや、もしかしてこの無礼なノックの主はこの女と関係があるのではないかということが、ほとんど同時に彼の意識をとらえていた。彼はやはり、ふり向くべきではなかった。一瞬、燃えるように顔が熱くなった彼は、あわててドアのほうに向き直り、なおも騒々しくノックする不屈きな相手に、少しうわずった声で、

むしろ恐る恐る返事をした。

「ああ、こちら、田所さんのお宅でしょうか？」

その声は意外と落ちついていて。

「さっき店の方から、こちらだとうかがったんですがね……」

それも若くはない、中年の、あるいはもつと上のような声だった。清二は、別に警戒するほどのこともないと思って、すぐドアを開けようとしたが、するといきなり後ろから襟首をグイッと引っぱられて、思わずバランスを失い、どしんと尻餅をついた。いつのまにか女がすぐ後ろに来ていて、彼の尻餅などどうでもいいといった様子で、じっと、食い入るようにドアを見つめていた。その心配そうな蒼い顔と、そそのかすようなブラジャーの紐が、彼の目を交互に強く射た。

「いないと言つて、お願い、わたしはいないと言つて！」

彼女は両手を合わさんばかりにして、清二の耳元に小さく口走った。彼は耳がくすぐったくつて、彼女の言っていることがよくわからなかったが、それでもすべてを了解したような気になって、ドアを開ける前に半裸の女を浴室にかくまい、彼女の靴を万年床のなかに投げ込み、それから、ええつと、それから……などどつぶやきながら、玄関のすぐ近くに落ちていたハンドバッグと、浴室のドアのところに脱ぎ捨ててあった女の衣服をこわごわ指につまんで、これも万年床のなかに隠すことを忘れなかった。

「いや、あの人なら、もう帰りましたよ、ええ、ついさっき」

彼はゴクンと生唾を呑み込んで、ドアの向こうに現われた、背の低い、頭のとっぺんがきれいにはげた五十がらみの男に向かって言った。

「やっぱりここは、なんでしょう、男ひとりのむさ苦しい部屋ですからね。最初は泊まるつもりで来たものの、一目見て嫌気がさしたんでしょうよ。おっしゃるとおり、ぼくは、店長から泊めてやれって言われましたし、第一、あんな状態ですからね。少し酔いが覚めるまで休んでいったほうがいいですよって、一応は止めたんだけど、

あの人つたら、ありがとも言わずに行っちゃいましたよ！」

男は顔をしかめて、黒縁の眼鏡の奥からじろりと清二をにらんだ。しかし、清二が気を取り直して負けずににらみ返してやると、その目が一瞬揺らぎを見せてよそへ逃げた。それから一度だけ、男はドアの内側に首を突っ込んで、狭いキッチンの向こうに三分の一ほどのぞいている部屋の様子を、さぐるようにじっと見つめた。もつとも、彼が探している女は、手前のすぐその、浴室にいるのである。清二はこのときになってはじめて、室内にいつもとちがう濃厚な匂いが漂っていることに気づき、はっとしたが、男はむしろ円満な、人のよさそうな笑みを浮かべて、「いいかね、きみ！」と変になれなれしく話しかけてきた。

「捨て場所もわからないまま、不幸を背負い込んだじゃいけないよ。不幸ってやつはいつだって、同情と手をつないでやってくるんだ。

ところが同情のほうはただの気まぐれで、あとに残るのは不幸だけってわけさ。よくあることだよ。だまされちゃいけない」

「はあ」とだけ清二は答えた。おおかたこいつも酔ってるんだろう、と思った。まだ何か言ってくるかと思ったその男は、足元の廊下にペツとつばを吐くと、さすがに強引な真似はしかねたらしく、そのまま帰って行った。ところが階段まで遠のいた足音が、またためらいながら戻ってきそうになると、清二はあわててドアを閉め、鍵をかけた。

とんだことで店に戻るきっかけを失った清二は、かくまった浴室の中でそのままシャワーを浴びだした女をどう扱ったものかと考え、しばらく散らかった狭い部屋のなかをうろつろした。このままにして出かけるのはやはり不安だし、女にとっても危険な気がした。かといって、すっかり安心して浴室から出てきた女に、あら、まだいたの、と笑われそうなばつの悪さが、ときとして彼を赤面させたり、用もないのに狭い部屋のなかをいつまでもうろつろさせたりするのだった。十分くらい、彼はそうしていた。さっきの男がまだ通路にいるかも知れないので、今出て行くのはやばいという用心



もはたらいていた。もつともそうやって待っているあいだに、彼の注意はもっぱら浴室から聞こえてくるシャワーの音ばかりに向けられていたのだった。それで、ふいにだれかが、ドアの外から鍵穴にキーを差し込む音がしたときは、いっぺんに全部の防護壁が決壊したような衝撃を受けた。

相手はまるで自分の部屋のように手慣れた感じで、彼が制止する暇もないまま、さっとドアを開けた。てっきりあの男が飛び込んで来るとばかり思った田所清二は、意外にも須田芳枝の姿をそこに認めて、かえって呆氣にとられてしまった。須田芳枝は、すました顔で部屋に入ってきて、ぬれた傘をわきに立てかけた。それから靴を脱ごうとして後ろに曲げた足に片手をやったとき、ひよいと顔を上げてまともに清二と目が合った。その目が仰天したようにむけひろがった。清二はどう言っているかわからず、彼女のほうでも挨拶さえ忘れた様子で、しばらく無言で、お互いが目の奥を探り合った。

『なんだよ、きみ、どうしてだい！』

『あら、あなただって、仕事はどうしたのよ！』

自然とこういう会話と照れ笑いに落ちつくはずだった二人の予感には、しかし、浴室から聞こえてきた賑やかに水の飛び散る音で瞬時にはじけ飛んでしまった。須田芳枝のアクセントの強い大きな目が、このときますます大きくむけひろがった。清二も冷や汗が出て、胸がドキドキし出した。

「誤解しちゃだめだよ。これはね、ちがうんだ」彼は苦しそうに言った。「話せばわかる。蒲生さんだって、証人になつてくれるさ。でも、ぼくはきみの裁きにしたがうよ。納得がいけないというなら、とことん話すよ。それでも許せないって言うんだったら、地べたに土下座してでも謝るよ（謝ることなんか、なにもないけどね！）。これはまったく、偶然が偶然を招いた、運命のいたずらつてわけさ。まったく、くだらないじゃないよ！ だけど……だけどこのいたずらつてやつは、一滴でも誤解が混ざると、たちまち運命そのものを変えてしまうんだからなあ！ いいかい、頼むから、いつものき

みでいてくれよ。出て行っちゃだめだよ。ぼくはこれから店に戻るけど、きみはここに泊まるんだ（でも、きみ、今夜はえらく早いんだね！）。それにしても、きみがぼくの部屋の合い鍵を持つてたなんて、こんなすてきなことはないよ。どうしてぼくに、それがわからなかったんだろう！これこそぼくの罪だったね。だから謝るよ。反省するよ。きみの奴隷になるよ。未来を誓うよ。だから、だから……お願いだから、そんなに、聞き耳を立てないでくれ！」

「のぞいてるわよ」須田芳枝は小さく、しかしとがった声で言った。「ほら、布団の下に……なんなの、あれは。まさかわたしへの当てつけじゃないでしょう。これじゃ一滴の誤解どころか、洪水だわ！ええ、大洪水よ！でもわたし……かえってうれしくなりました。うれしくてうれしくて、胸がふるえるほど……だってもう、わたしがあなたのことで悩むことなんかないってことが、はつきりしたんだもの。わたしはわたしで、自由に生きていけばいいんだってことが分ったんだもの。あなたがそんなにお利口な人だと分っていたら、わたし、きっと別の人にそそのかされて、とつくにあなたと別れていたと思うの。ええ、そうよ。もうなんの未練もないわ。むしろ清々した気持ちで、心おきなく、あなたにさよならが言えそうよ！」

須田芳枝のつぶらな眼に涙が光った。田所清二は微笑みかけたまま茫然となつて、そこに立ちつくした。

首を長くして待つていたとしか思えないくらい一人で店のなかを忙しそうにうろつろしていた蒲生浩平は、戻ってくるのが遅いといつて、清二を叱った。清二のほうはそれどころでないほど気分が沈んで、まともな返事すらできなかった。土砂降りの雨は次第に小降りになり、その夜のうちに止んだ。清二は外がすっかり明るくなるまで、彼と一言も口をきかなかった。彼があの子のことを気にかけて、何度か質問してきても、黙つていた。時間が来て、ローテーションの引継ぎを終えて帰ろうとするとき、彼ははじめて蒲生浩平に視線を向けて、「だからやつぱり、あなたが連れて行くべきだったんですよ、僕ではなく、あなたがね」と今さらのように恨みがまし

く言った。蒲生は、ピクピク顔をふるわせて、「おい、それはどういうことだ。何かあったんだったら、おれにも聞かせてくれたっていいじゃないか。え、あの人は弁護士だと言って、おれに名刺まで見せたんだよ。おまけにあの女の亭主だつて言うじゃないか。おれはただ、すべきことをしたまでだよ。つまりそれがおまえには、気に入らなかつたってことか？」と早口でまくし立てた。

清二は黙って、そのまま彼と別れた。蒲生が心配そうにあとから追いかけてきて、朝食でもおごろうかと誘ってくれたが、とてもその気になれなかつた。しかしその後、アパートへ着くまでのわずかな五分の間に、彼の心に予期せぬ奇妙な変化が起こつた。もつともその変化の原因は、昨夜来、彼の頭にずっとこびりついていていたことでもあつた。彼は急に晴れがましいはつらつとした気分になつて、少しふるえだした手でズボンのポケットから鍵を取り出したが、案に相違してこのとき部屋のドアのロックは外れていた。それから、恐る恐る中を覗いてみると、いつもわきへずれて波打っている万年床の布団が、このときはすつきりと、部屋の真ん中に平べったく整えられていた。彼の気分がこれでまた変つた。枕元に伏せてあつた小さな紙切れは、一瞬彼をどぎまぎさせたが、それにはただ簡単に、『ありがとう、加奈子』と書かれていただけだつた。

運の悪いことに、その紙切れは、昼過ぎにやってきた妹の美穂に見つけられた。彼女はそもそも部屋に入ったときから、いつもとは違ふ種類の濃密な、ある種危険な匂いがするのに気づいたらしく、「なに、この匂いは！」と少し大げさに叫んだほどだつた。それからまっすぐ枕元までやってきて、坐りこみ、かすかに紙切れを取り上げる音をさせて、しばらくおとなしくしていた。寝たふりをしたまま、また何を言い出すかとどきどきしていた清二は、やがて彼女がその紙切れを丸めてポイツとゴミ箱に投げ入れる音を聞いて、片方の耳たぶがかつてにぴくつと動くのを感じた。妹とはいえ、それは許せないぞ、と思つて、いつ目を覚まそうかとタイミングをはかっている、ふいに、目をつぶつたままにしているその額を、指の

関節でコンコンとこづかれた。

「火事だあ！ 火事！ 火事！ だれかが火をつけたわ！ いっそ消防士になったらどうなの。まさか採用通知まで燃えてないでしょうね！」

清二はこのかわいらしい医学生を、内心では少し恐れていた。けれども一方では、どこか小馬鹿にしていた。彼はおもむろに眼を開くと、ごそごそと布団から這いだして、ゴミ箱の中をあさった。そしてしわくちゃになった紙切れを大事そうに引き伸ばしながら、また布団に戻ってきて、それを妹の目の前で何食わぬ顔をして枕の下に隠し、薄い布団の中に自分も隠れた。

「呆れたわね。やっぱり今度も駄目だったの？」

「まだ分らないよ」彼は布団の中から答えた。

「じゃ、新しい人のほうはどうなのよ。その紙切れのひとつ。今度もまた、わたしに紹介してくれるの？」

「おまえのほうはどうなんだい、権田浩史のことをどう思ってる？」  
ほんのわずかなあいだだったが、このとき、美穂の言葉が途切れた。続いて聞こえてきた声も、それまでとはがらりと調子が変わっていた。

「わたしね、そんなに早く自分を固定したくないのよ。権田さんがどうのこうのって言うんじゃない、もっと、色んな可能性に挑戦したいの。たとえば、兄さんみたいに」

「それは悪い傾向だね」すかさず彼女を遮って、清二は布団からひよいと首だけ出した。「僕はしょっちゅう追い立てられてるよ。可能性に挑戦するなんてとんでもない。自分では早く適当に身を固めたいのに、どこにも行き場がないんだからなあ！」

同じように行き場がなくて困っている男が、このときずかずかと部屋に入ってきて、寝ている清二には目もくれず、二言三言、美穂に挨拶した。美穂もそれに答えたが、二人ともその声は変にそわそわしていて落ち着かなかった。「病気ですか」と権田浩史は、恐ろしく真面目くさった神妙な口調で、このときも清二ではなく美穂

に尋ねた。美穂は肩をすくめてプツと笑った。清二はふと、昨夜あのまま別れた須田芳枝のことを思い出し、急にいても立つてもいられなくなつて、がばと布団から跳ね起きた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6010m/>

---

六丁目の嵐

2010年10月10日18時54分発行